



十二月

パストラル尼崎

師走

10104.2020(R2)年11月25日

〔編集・発行〕

パストラル尼崎

尼崎市潮江1丁目10-2

Tel. 06-6493-0521

Fax. 06-6493-0301

発行責任者：山本 弘樹

◆十二月の歳時記◆ 「クリスマスの歴史」



今やクリスマスは年末の大イベントとなりましたが、いつからこんなに日本中が大騒ぎするようになったのでしょうか？歴史をたどってみると、明治の半ば頃から少しずつ広がっていったようで、当時の新聞記事が外国人居留地の「珍しい風景」としてその様子を取り上げています。

二〇世紀に入ると、新聞広告にサンタクロースが登場し、プレゼントを贈るのが一般的になっていきました。

特に日露戦争後の帝国ホテルのクリスマスは、なんと「太神楽」や「カッポレ」、また心中もののお芝居「お半長」などが演じられ、キリスト降誕とは関係のない出し物ばかりです。すでに「日本化したクリスマス」が明治末年には根付いていた事がわかります。それにしても・・・汗

キリスト教徒でもないのに、クリスマスに大騒ぎするいい加減さというか、その自由さは、初詣は神社で、結婚式は教会で、お葬式はお寺でという、どんな宗派でもウエルカムという、ある意味、日本人のいい所かもしれないですね。笑

昭和になるとカフェやダンスホールで、大人たちも大騒ぎするイベントに変わっていきます。昭和六年の新聞には「クリスマスイブを踊り抜く」という見出しで、大勢の人たちが三角帽を頭に寄せ、着物姿やドレス姿が入り乱れ、ダンスに興じる写真が掲載されています。

さすがに戦時中は自粛されますが、敗戦後はさらに盛り上がり、風俗店やダンスホールで大人たちが騒ぐクリスマスになり、酔っ払った集団が歓楽街で大騒ぎをして、一種の無法地帯が生まれていました。これって現在のハロウィンに興じる若者に似ていますね。

その後は、家族でのアットホームなクリスマスやバブル時代のホテルで過ごす豪華なクリスマスなど、形を変えながら「日本風クリスマス」は、立派に君臨しています。今年はきつと、歴史に残るクリスマスになるかもしれませんね。汗

一流の画家はなぜ長寿なのか？

- ・葛飾北斎：89歳・横山大観：89歳
- ・東山魁夷：90歳・シャガール：98歳
- ・熊谷守一：97歳・片岡球子：103歳

上記の方々は、言わずと知れた著名な画家たちですが、北斎など寿命が短命だった頃と比較しても超長生きですよ。確かに「画家は長生きする」とよく聞きますが、この説を解説しているのが『一流の画家はなぜ長寿なのか』という本。以下はその紹介文です。

「死後もなお世界中で愛されている画家たちは、ただ寿命が長かっただけでなく、晩年まで精力的に情熱的に創作活動が続けていた。その秘訣は「心のあり方」「脳の使い方」「基本的な生活習慣」にあると医学博士の著者は解く。どうすれば健康的に長寿で、脳や感性を活発に働かせられるのか？「長寿」という人類の永遠のテーマに迫る。」

- ◎規則に縛られないで生きるということ
- ◎生涯に93回も転居をした北斎の自由な生活
- ◎60代からチャレンジに向かった東山魁夷の情熱
- ◎ピカソは「自分流のシステム」を作ること大成功
- ◎創造力の鍵は「右脳」にある
- ◎画家たちの脳はいつもハッピー
- ◎徹底的にシャガールは愛を深めていった
- ◎ピカソの人生は心が充実していた。他



北斎

変わる年末年始

小康状態で推移していた新型コロナの感染者も、ここにきて大幅に増え、恐れていた第3波がきたと連日報道されています。

そんなコロナ禍、誰も経験した事のない初めての年末年始を迎えようとしています。たとえば初詣では、手を清める際の「ひしゃく」や拝殿の鈴の緒の使用を禁止したり、東京千代田区の神田明神では、「オンライン授与所」を開設。お守りやお札、玉ぐし、絵馬などを求める事ができるようにするのだとか。汗

また、「おせち」にも異変が起きています。「おせち」といえば、お重に詰めたご馳走をみんなでつつきながら頂くものですが、今年は、感染予防という事で、取り分け不用の「一人用のおせち」が好評だとか。また帰省を控える分、ちょっとリッチにという事で、核家族用の豪華おせちも用意。あるデパートでは、コロナ禍ならではの「おせちも充実。疫病を取り払う妖怪「アマビエ」のデザインを重箱のふたや具材に入れた商品や、コロナ太りを意識した「ヘルシーおせち」を新たに投入するなど、各社、例年と違う品揃えで商戦に挑んでいます。何だかお弁当とどう違うの？と思うのは私だけ？汗



家庭画報より